

福井中學生物研究班時代の思い出

白 崎 重 雄

私が福井中学に入学したのは、昭和17年の4月、太平洋戦争が始まる前年で、戦時色がまさに最高潮に達しようとし、物資の欠乏は益々深刻となって来た時でした。それでも幸せなことには、私達新入生は、新調の牛皮の編上靴をふみしめて、牧ノ島原頭に憧れの校門をくぐることを許されました。

牛追い帰る云々と、室田外吉先生の国語、「大和言葉」の名講義と共に、忘れられない授業は、堀芳孝先生の生物学の授業でした。

校庭に爛漫と咲きほこる桜の木の下での、桜の花の観察、胡麻塩まじりの頭を丸刈りにして、有名なニックネームそのままの、なよなよとした先生特有のポーズで、優しく説明して下さるその太い眉毛の下に、時折り、ギラリと鋭い眼光が輝く。私達は魅せられたように、1本、1本雄しべをルーペで覗きこんだが、雌しべの奥から、ほのかに匂う甘い蜜の香りを、今も忘れることが出来ません。

福中在学5年の間で、学窓を離れて軍需工場に動員されていた時代と、敗戦の混乱期を除けば、放課後の殆どの時間は、生物学の教室にいて、生物班の仕事をするか、標本の整理や観察をしていたものですが、堀先生の腰巾着の様に、私を生物学の部屋から離れられなくしてしまったのは、1本のカタクリの花でした。

入学して間もない4月29日の天長節の日に、父母と一緒に小和清水に山菜取りに行行って採集してきたイチリンソウやカキドオシ等の春の野草を、生物の時間に習ったばかりの押花で標本にしました。勉強部屋の隅の床の上に、新聞紙を重ね、長持ちを載せて重しをかけ、朝晩2回紙を取り替え、花の形や色の仕上りに細心の注意を払って作ったカタクリの標本は、特に美しく出来上り、堀先生の絶賛するところとなりました。「お前は天才じゃ」と級全員の前でお褒めの言葉をいただきましたが、その時の感激が、36年の星霜を経た今も尚、スマイレの花などに血道を上げて、山を歩きまわらせているのだなと思うと、堀先生の一言の影響の大きさに、今更の様に驚嘆しないわけにはおれません。

昭和18年春 若杉孝生氏が一級下に入って来られてからは、彼の異常な程の熱心さによって、私達生物班の活動は、更に一層活発となりました。土曜日、日曜日ともなれば、胴乱を肩に捕虫網を携えて、足羽山、深谷は勿論、永平寺、柚山、日野山、鬼ヶ岳、木ノ芽峠、南六呂師等へと足を伸して、採集会を重ねました。

秋の柚山の帰り、先頭を馳け下りた数学の江守先生が、棒で大きな蜂の巣を叩いたため、蜂の大群に追いかけて、堀先生は背中を刺されて熱を出されるというハプニングも、つい昨日の事のように思い出されます。

更に部子山、富士写ヶ岳、丈競山、冠山、白山等々、当時としては相当に困難と思われる山へ

も登り、標本室には、私達の集めた標本を整理して収めたり、生物班の班誌「自然」も、三号迄大変苦勞をして発刊しました。

創刊号を出したのは、昭和19年の春か夏だったと思いますが、戦争は益々激しくなり、学校には1・2年生以外はもう誰もいなかった頃ですから、活動を続けている班は外にはなく、班誌等思いもよらぬ時だったから、「自然」の創刊号を手にした加藤佐助校長は、目を丸くして驚かれたものでした。藁半紙にガリ版刷りで全く読み難いものでしたが、表紙はケント紙を使い、カンナのスケッチと、毛筆で大書した自然の文字が印刷されていて、仲々当時としては立派なものでした。

金沢大学医学部病理学教室で研究を終え、福井に戻ることにになり、済生会病院に勤務するようになってから間もなく、堀先生が私の外来におみえになりましたが、極度の神経衰弱に悩んでおられ、いつも頑固な不眠と激しい頭痛を訴えておられました。昔のお元気なお姿が想像出来ない程に、やつれ細られたお顔に接する度に、私は心痛まずにはおれませんでした。

一峰、二峰、三峰と越える、石徹白登山道の険路や、夢の世界の様に美しいお花畑の話を、私達に話して聞かせて下さった時の堀先生の燃えるような瞳は、少年達の胸に果しなきロマンの火をともして下さり、山への憧れと情熱をかきたてて下さったのです。

此の数年来、再び福井の山々から、北アルプスの山稜と、山歩きを重ねている私であります。福中在学5年間の生物研究班の頃の想い出と、恩師堀芳孝先生の薫陶が、今も私の胸の火を燃し続けているのだと思います。

(田中病院副院長)